

# ミステリ博物館

赤川次郎



852881

はくぶかん  
ミステリ博物館

あかがわじろう  
赤川次郎



角川文庫 6101

昭和六十年七月十日 初版発行  
昭和六十一年五月二十日 十一版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)二三八—八四五—  
営業部(〇三)二三八—八五二—

〒一〇二 振替東京③九〇八

印刷所——旭印刷 製本所——

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたし

定価はカバーに明記してあります

Printed in Japan

¥460-

- 2. 3. - 7

119015

ISBN4-04-149729-9 C0193

# ミステリ博物館

赤川次郎



角川文庫 6101



## 目次

『密室』

五

『人間消失』

五

『脱出』

二七

『怪談』

一六三

『殺人予告』

二〇七

『幽霊屋敷』

二四四

『汚れなき罪』

二八九

解説

横井司  
三三五



# 『密室』

## 1

「殺人を見に来ないか？」

その言葉は一枚の枯葉かれはのように私の耳をかすめた。

聞き違いだったとも思えない。〈殺人〉とはっきり聞き取れた場合、他のどんな字句が考えられるだろうか。〈殺陣〉？ 時代劇でやる立ち回りという奴やつだが、あれは普通「たて」と言うものだ。

大安と日曜の重なった日のホテルは、想像もしなかったような混雑だった。ロビーは、披露ひろう宴えんを終えた客たちで溢あふれている。

私は幸い早目に来て座っていたので、一時間近くも、立ちんぼで友人を待つという不運に見舞われずに済んでいた。しかし、引出物ひきでものの包みをドサツと横へ積み上げられて、次第にソファの端へ端へと追いやられてしまい、終いには、私一人が異端いたんの徒として、後ろめたさすら感じなくてはならぬはめに陥おちいっていたのである。

もっとも、その言葉が耳に入っただのは、私がソファの端に座っていて、しゃべった本人が、すぐわきを通り抜けて行ったおかげであった。

喧騒けんそうと、たちこめる酒の匂においとで、多少ぼんやりとしていた私はその一言で、急に目を覚まされたような気になった。しかし、言葉そのものは聞き間違まちがえてはいない。その点は自信があ

った。

それにしても、いかにもその場に不似合な言葉ではある。どこかの暗がりの片隅かたすみでも言われるのならともかく、このにぎわいの中だ。しかも言った当人も、たった今、披露宴の席を出て来たばかりとしか思えない、黒のダブルの背広、シルバータイというスタイル。

どう見ても人殺しに縁えんのあるとは見えない三十そこその青年である。

それを聞いた方は、その友人であろう、ほぼ同じ年代の、いささかくずれた感じの若者だった。言った方が、至極しごく楽しげに、赤ら顔なのに、聞いている方は、不愉快ふゆかいさを隠かくそうともせず、仏頂面ぶつちやうめんをしている。

二人は私から見えるソファがちょうど半分開いたので、そこへ腰こしをかけた。そこでの声は私の耳には届かなかったが、様子から見て、さっきの言葉を発した青年が、もう一人をしきりに何かへ誘さそおうとしており、相手がそれをうるさげに無視しつづけているというのは明白だった。

「殺人を見に来ないか？」

こんなセリフが、一体どんなときに言われるものなのか、私にはほとんど合点がてんが行かなかった。その故に、また好奇心を駆り立てられたのも事実である。

そこへ、

「お待たせして——」

と女の声が私のわきを通って行った。

背の高い、ツイード姿の男にエスコートされたその女は、バランスのとれた体つきの美人だ

った。大きな帽子<sup>ぼうし</sup>、白っぽいスーツ、白い手袋<sup>てぶくろ</sup>というスタイルから見ても、まず花嫁<sup>はなよめ</sup>に間違いないまい。

むろん、その表情は活き活きとして、「幸福に輝くばかり」という表現がぴったりだった。一緒にいる、夫と覚<sup>おぼ</sup>しき男性は、ちょっと年が行っているようで、控<sup>ひか</sup>えめに見ても三十五、六と思われた。花嫁より十歳<sup>さい</sup>は上であろう。

女が先にソファに座っていた二人に何か話しかけると、例の言葉を発した男の方が、何やら女に説明した。女の方は、もう一人の、ふさぎ込<sup>こ</sup>んでいる男の方へ、

「いらっしゃいよ、楽しめるわ」

と声をかけた。——高い声なので、私の耳にも届いたのだ。

男の方は、なおも断りつづけている様子だったが、それでいて態度の方は明らかに軟化<sup>なんか</sup>しているのが見て取れた。花嫁に惚<sup>ほ</sup>れてでもいるのだろうか。

女が、あと二言三言声をかけると、男は諦<sup>あきら</sup>めたように肯<sup>うなず</sup>いた。

「よかったわ！」

女がそう言って、魅力<sup>みりよくまんてん</sup>満点の笑顔になった。

「後で必ずね」

そう言い残して、花嫁は夫と腕<sup>うで</sup>を組んで、行ってしまった。後にはまた二人の男が残ったが、すぐにどっちからともなくソファを立て、ロビーの奥<sup>おく</sup>の方へと消えた。たぶんバーへでも行ったのだろう、と私は推測した。

二人が消えた方をいつとき見ていると、

「とびきりの美人でもいたのか？」

と声がして、振り向くと待っていた友人の顔があった。

「久しぶりだな」

と私は中尾旬一の手を握って言った。「相変らずひどい遅刻だぜ」

「時計がないんだ」

そう言って中尾旬一はニヤッと笑った。

中尾は私より五歳ほど上——つまり四十代の初めというわけだったが、見ようによっては三十代とも、逆に五十近くとも見られる、不思議な男だった。

いささか肥満気味の体を持て余すように歩くのがくせで、何かというとすぐに、

「疲れた」

を連発する。しかし、その実、ちっとも疲れてはいないのであって、むしろ私などより体力はある方なのだ。

少し髪が薄くなったせいで、額がよけいに広く見える。知的で、それでいて無邪気という印象を受ける、小さな眼。全体としては童顔で、そのせいで若くも見られるのだろう。

「ずいぶん待ったのかい」

と中尾は訊いた。

「まあ、ほんの一时间」

と私は言つてやつた。

「しかし、そう退屈たいくつしている様子にも見えなかったぜ」

中尾が、私の隣となりにあった引出物をぐいと押しのけて、強引に座り込んだ。

「ちょっと面白いことがあってね」

「ほう」

私が、例の言葉から始まって、今見たばかりの四人の男女の様子をできるだけ細かく話してやると、中尾は、

「そりゃ、何とでも考えられるじゃないか」

と言つた。「その新郎しんろうが画家で、〈殺人〉はその新作の題名かもしれない。それとも、〈殺人〉という劇をどこかで上演しているのかもしれないぜ」

「本気でそう思つてるの？」

「どうかね。調べようがない以上、どう考えたって同じことさ」

そのとき、ふと気が付くと、さっきの花嫁が一人で戻もどつて来る。

だが、どうも様子がおかしいのだ。ひどくせかせかした足取りで、不安な表情をしている。さっきの、幸せそのもの、といった輝かがやきはどこにも見えない。

「あれが花嫁だよ」

と私は中尾へそつと言つた。「だが何だかおかしいぞ」

花嫁はソファの所まで来ると、さっきの二人がもう座っていないのを見て、がっかりしたよ

うな表情を浮かべた。私は、二人がたぶんバーへ行つたことを教えるべきか、一瞬思い悩んだ。だが、そうする前に、彼女の方が、真直ぐに私の方へ進んで来た。面食っていると、彼女は、「中尾先生じゃありませんか」といくぶん声を弾ませて訊いた。

「これはどうも。久しぶりだね」

中尾の方は大してびっくりもしていない様子。こっちはますます面食ってしまった。

「やっぱり。——私を憶えておいでですか？」

「もちろんだよ、若杉貞子さん」

「今日から上岡貞子ですの」

「そいつはおめでとう。——ああ、これは僕の友人でね、谷川君だ」

「初めまして」

と彼女が会釈する。私もあわてて、もごもごと口の中で呟いた。

「お会いできて良かったわ。実は、中尾先生にお願いしたいことがありますの」

「何か困ったことでも？」

「ええ」

と上岡貞子は肯いて言った。「人殺しがありそうなのです」

大安吉日の夜としては、一向に安らかではなかった。

「不安不吉って感じたね」

私は車の窓から外を見ながら言った。

「殺人にはもって来いの夜だよ」

中尾はむしろ楽しげですらあった。

「心配にならないのか？」

「どうして？ 結婚祝いのパーティに招待されてるんだ。憂鬱ゆううつな顔で行っちゃ申し訳ないぜ」

「君はあの女性とどういう知り合いなの？」

「僕の教え子だよ」

「君が教師をしていたとは初耳だね」

「君だってきつとやってるさ。家庭教師って奴だ」

と中尾は愉快そうに言った。

「何だ、そうか。じゃ大分前の話だね」

「彼女はまだ高校一年生ぐらいだったかな。そのころから美人ではあったよ」

「——今から行くのは、彼女の家なんだね？」

「そう。まあ、大分長いこと訪ねたこともないから、よくは分らないが、たぶんこっちの方角だったと思うよ。何しろ途中とちゆうの風景が別の世界のように変ってるからな」

外は荒れ模様だった。——まだ夕刻だというのに、まるで真夜中のような暗さ。いや、目に

は色々と見えているのだが、それでいて底知れない暗さといおうか、どことなく嵐あらしの前という感じの暗さである。

風が唸うなりを立てて窓の外を巻いていた。空を見上げると、黒雲が滑すべるように走って行く……。

「今夜は荒れ模様だぜ」

と私が言うと、中尾も肯いて、

「色々と荒れ模様だな」

と言った。

上岡貞子が、なぜ殺人の心配をしているのかは、一向に分らぬままであった。彼女が何か説明をしかけたとき、彼女の夫がやって来るのが見えたのだった。

彼女は夫、上岡征二郎を我々に紹介しょうかいし、私たちを、今夜のパーティに招いたと告げた。私はちよっとびっくりしたが、中尾の方は一向にそんな様子も見せず、平然と上岡征二郎に挨拶あいさつをしていた。

上岡は、近くで見ると、そう年齢ねんれいが行ってはいないようだった。三十二、三というところか。ただ、上等な服を着てはいるが、どことなくアンバランスで、一種、成り上りの印象を拭ぬぐい切れない。

貞子は、後で車をホテルの前へ回すから、それに乗って来てくれと言って、夫と共に忙いそしうに姿を消した。

そして今、私たちは、その車に乗って、上岡貞子の結婚披露パーティへと向っているのだ。

「——ああ、思い出した」

と中尾が言った。「確か、あの林の奥だったと思うよ」

都心からたつぷり一時間も走って、車はまだ未開発の雑木林が方々に残る中を抜けていた。中尾の言った通り、車は急に細い道へと折れて、林の奥へ奥へと進んで行く。

やがて、その中に、古びた洋館が見えて来た。ほの暗い空に、黒々とした姿を浮かべたその建物は、窓に明りがなかったら、廃屋と見えたかもしれない。

車が玄関げんかんの車寄せに停とまって、運転手がドアを開けてくれる。外へ降り立ったとき、突然、あたりを白銀色に染めて、雷鳴らいめいが轟とどろいた。

「やれやれ」

中尾はニヤリと笑って言った。「舞台装置は整ったってところだな」

玄関のノッカーを軽く鳴らすと、すぐにドアが開いた。

「どなたかしら？」

出て来たのは、二十二、三歳の、愛らしい顔立ちの娘だった。骨相学に詳くわしくない私でも、上岡貞子との相似点そうじてんは容易に見分けられた。

「君は淑子さんだね」

と中尾が言った。

「え？——あ、中尾先生ね！」

「そうだ。大きくなったね——というのは失礼かな」

「昔の自分を知っている人に会うって、照れくさいものでしょ。——さあどうぞ」

「これは僕の友人の谷川君だ。お姉さんに呼ばれて来たんだが……」

「あら、そうでしたの。聞いてなかったんです。姉も忙しくって。——どうぞ。外はひどい天気ね」

若杉淑子は、白い華やかな感じのワンピースを着ていた。実に潑刺<sup>はつらつ</sup>として、若々しい。私個人の好みで言えば、姉よりもこの妹の方に魅力を感じる。

広々としたホールを抜けて、客間へ通される。——邸<sup>やしき</sup>の中は外の荒れ模様が嘘<sup>うそ</sup>のように静まり返っていた。

客間へ入ると、さつきホテルのロビーにいた二人の青年が、グラスを手に、ソファで休んでいた。

「まあ、また飲んでるの」

と淑子が眉<sup>まゆ</sup>をひそめる。「若くして酒に身を持ち崩<sup>くず</sup>す、ってのははやらないわよ」

「やけ酒ってのは、はやりすたりとは関係ないよ」

さつき「殺人を見に来い」と誘われて渋<sup>しぶ</sup>っていた方の青年である。

「先生、こちらは、姉に振られてしょげてる詩人の柳慎一さん。もう一人が南田さん。姉のピアノの先生」

「中尾と申します。よろしく」

互いの簡単な挨拶が済むと、中尾と私も勧められるままに、グラスを出して好みの酒を注い